

1 調査結果の概要と課題・対策について

『育てる(栽培)』

小学6年生の「育てる(栽培)」に関わる設問の数値が、昨年度に比べて全て上がっていた。しばたの心継承プロジェクトをはじめ、これまでの学習や活動を通して地域の食や農に興味・関心が高まっていることが伺える。

『作る(料理)』

小学6年生の「一人で弁当を作ることができる」割合が減少したが、中学3年生の「小煮物を一人で作ることができる」割合は増加した。

小学校の調理実習に関しては、ほとんどの学校で弁当作りを再開したものの、感染のリスクに配慮し、調理する品数を減らしたり、実習時間を短くしたりするなどの対応をとった。今年度は結果に結びつかなかったが、次年度はできるだけコロナ禍前の方法に戻し、調理実習を通して子どもたちに一人で弁当を完成させるイメージを持たせ、実際の弁当作りにつなげられるような支援をしていく必要がある。

中学校の小煮物作りの調理実習に関しては、地域の食生活改善推進委員への調理指導協力を再開した学校が多く、近くで教えてもらいながらの調理が結果に結びついたと考えられる。

『食べる』

「朝食を毎日食べている」割合は、調査開始時から下降傾向にあったが、下げ止まりの兆しが見られる。朝食を食べない理由としては、「食欲がない」や「食べる時間がない」が多かった。朝食を食べる習慣を身に付けることは基本的な生活習慣の形成にもつながることから、引き続き“早寝・早起き・朝ごはん”の指導を行う。特に、保護者の朝食摂取状況は子どもへの影響力が大きいことから、“朝食の大切さ”について、家庭にも発信し続けていく必要がある。

「家族のおとなと一緒に食事をしている」「主食・主菜・副菜がそろった食事をしている」「食事がいつも楽しい」「いただきます、ごちそうさまのあいさつをいつもしている」割合は昨年度に引き続き、数値の上昇が見られた。“共食(誰かと一緒に食事をする)”が、パランスのとれた食事や楽しい食事、食事マナーの習得につながっていることが伺える。

『返す(リサイクル)』

小学6年生・中学3年生ともに「食物を残すことがもったいない」「食物を残さないことや生ごみをリサイクルすることは、自然環境を守るために大切だと思う」割合が増加した。近年、SDGs(持続可能な開発目標)に関する情報を見聞きすることが増え、子どもたちの意識にも変化が出てきたのではないかと考えられる。

『生活習慣』

就寝時刻が年々遅くなっており、生活時間の夜型化が不定愁訴をもつ児童生徒の増加にもつながっていると考えられる。対策の一つとして、前述のとおり、“朝食摂取”の指導を続けていく必要がある。